特別展

# 長谷川等伯と雪舟流

## 2012年1月20日(金)～2月19日(日)

桃山時代を代表する画家長谷川等伯(1539-1610)は、晩年自作に「雪舟五代」と記し、室町水墨画を大成した雪舟等楊(1420-1506？)の画系に連なることを高らかに謳い上げました。等伯の言葉を親交の深かった日通上人が筆録した「等伯画説」(重要文化財 本法寺蔵)にも、雪舟の弟子等春から祖父、父、自身へと続く雪舟流の正統な継承者であることが記されています。今回の展覧会ではこの「自雪舟五代」と署名された作品が5点集まります。

- 《竹林七賢図屏風》6曲1双 両足院蔵(京都市) 慶長12年(1607)(署名部分「自雪舟五代長谷川法眼等伯筆 六十九歳」)
- 《黄初平図》2曲1隻 個人蔵 (署名部分「自雪舟五代長谷川法眼等伯筆」)
- ◎《烏鷺図屏風》6曲1双 DIC川村記念美術館蔵(署名部分「自雪舟五代長谷川法眼等伯筆」)
- ◎《日通上人像》1幅 慶長13年(1608) 本法寺蔵(京都市)(署名部分「自雪舟五代長谷川法眼等伯筆七十歳」)
- 《柳橋水車図屏風》伝長谷川等伯筆 6曲1双 慶長12年(1607)MIHO MUSEUM蔵 (署名部分「従雪舟五代長谷川藤原等伯六十三歳書之」)

◎:重要文化財

◎《烏鷺図屏風》DIC川村記念美術館蔵

この「自雪舟五代」という署名は、現在伝わる作品の中では、61歳の時の《仏涅槃図》(大法寺蔵)が最も若い時のもので、等伯は72歳で亡くなるまでたびたび作品の中に書き入れました。晩年の等伯は既に十分な名声を得ていましたが、高級ブランドであった雪舟を利用し、自分はその直系であるとしてさらに自らの存在を高めようとしていたと考えられます。

等伯は現在の石川県七尾市に生まれ、当初は信春と号して能登地方を中心に日蓮宗関係の仏画や肖像画を主に制作、33歳の頃上洛して以降は、人物・山水・花鳥画と幅広く作画活動を続けました。華麗な金碧障壁画を描く一方で、晩年旺盛に制作された水墨画作品群には力強い生命力がみなぎっています。その人生は旺盛な制作意欲を以て下剋上の戦国時代を生き抜いた画家と言えます。同時代には狩野永徳を中心とする狩野派が信長・秀吉ら天下人に重用され画壇を牛耳っていましたが、永徳が48歳の若さで亡くなってのちは、等伯はまさに画壇の雄として名を轟かせました。

一方、雪舟等楊は、備中国赤浜村(岡山県総社市)に生まれ、当館は、雪舟流をコレクションの大きな柱としています。「等伯画説」には、中国人画家牧谿・玉澗らの名が記載されており、雪舟も彼らの画風から学んでいます。

本展では、能登時代の仏画をはじめ、京都で人物・山水・花鳥画と幅広く制作された等伯作品に加え、当館所蔵品を中心とした雪舟関連作品を同時に展観します。雪舟関連では、先述した中国絵画に加え、秋月等観、如水宗淵、惟馨周徳、等伯と同時代に活動し雲谷軒(庵)を受け継ぎ「雪舟末孫」を称した雲谷等顔と「雪舟四代」と款記した息子等益、雪舟に私淑した関東水墨画の雪村周継らの作品を紹介します。雪舟と等伯をつなぐ等春の作品は、《花鳥人物図貼交屏風》(重要文化財・個人蔵)が出品されます。等伯と雪舟流との画系の継承やそれぞれの独自性などに注目しながら、じっくりご鑑賞いただければ幸いです。

【主任学芸員　中村麻里子】

《花鳥図屏風》妙覚寺蔵(岡山市)

Hasegawa Tohaku and followers of Sesshu

原田 直次郎「西洋婦人像(山本芳翠模写)」

## よそんちの展覧会

### 神戸ビエンナーレ2011 高架下アートプロジェクト
### 2011年10月1日～11月23日
### 『銀の雨・金の環』チーム‘銀の雨’

91・92号で紹介した現代テキスタイルの続編です。当館の屋内広場にボタンを並べてくれた戸矢崎満雄さん率いる神戸芸術工科大学のチーム‘銀の雨’が、再びボタンを並べるというので見てきました。「戦後の闇市から出発し、今も独特の雰囲気を残す元町高架下(モトコー)と現代アートの融合をめざす」というアートプロジェクトで、コンペによって選ばれた13作品が高架下の空き店舗に展覧されました。

元町駅から神戸駅に向かって、本当にここ？とちょっと躊躇するような(案内看板も見当たらず)狭く古びた商店街を歩き始めました。シャッターが並ぶ中、ところどころで衣料品店、雑貨屋、古道具屋などが店を広げていました。元店舗に置かれた作品は、場所がらか、歴史や記憶、集積を連想するものが多く、どことなく哀愁が漂い、「きらkira」というプロジェクトテーマも実に繊細な輝きでした。

『銀の雨・金の環』は、銀ボタン金ボタンを中心に5万個の中古ボタンが使われ、天井からつり下げられた銀ボタンはきらきらと輝き、雨の雫のよう。床に広がる七色の輪は目にも鮮やかでした。時間がとまったような静けさと今にも動き出しそうなエネルギーも感じられました。

戸矢崎さんのコメントには、現代は美しくも重く冷たい銀の雨が降り注いでいるような時代ではないか。しかし、無数の雨が地に落ち、金色とカラフルな波紋に変わることにより未来の光を暗示している。とあります。本当に未来が明るいかどうかはわかりませんが、「きらkira」が過去や現在の輝きではなく、未来を志向していることに鑑賞者に対する強い働きかけがあったように思いました。

【学芸員　福冨 幸】

### 平成23年度 展覧会スケジュール(1月～4月)

| | | |
|---|---|---|
| 特別展 | 長谷川等伯と雪舟流 | 1月20日(金)～2月19日(日) |
| 岡山の美術展 | 岡山の美術展 | 12月20日(火)～2月19日(日) |
| | おかやまアート・コレクション探訪Ⅳ 野崎家コレクション | 2月24日(金)～4月８日(日) |

### 編集後記

美術館ニュース95号をお届けします。もう今年も終わりだなぁ、気付けばそんな時期になってしまいました。この1年間で世の中は本当に変化したように思います。美術に携わる身として、一個人として、人との繋がりの大切さを実感した1年でした。これまでとこれから、今までじっくりと考えてこなかったことにも、向き合う時間が持てたことで、一瞬、一瞬を大切にする心構えが出来たように感じます。“美術を通して皆様と関わっていく”その強い気持ちを持って、これからも日々成長する美術館でありたいです。【O.M.】


美術館ニュース 第95号
発　行：2011年12月
発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL：086-225-4800
E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp


岡山県立美術館

# 美術館ニュース

THE OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART


95
2011 WINTER

## 原田直次郎（はらだなおじろう）「西洋婦人像（山本芳翠模写）」 制作年不詳

デコルテの大きく開いた白いドレスを身に纏った女性がプロフィールで描かれている。凛とした眼差しで前を見据えるその横顔は、この女性の理知的で気品のある印象を強めている。小さな白いイヤリングと鮮やかな赤の首飾りがアクセントとなり、女性の肌の白さをより一層際立たせている。

これは、山本芳翠（1850～1906）の代表作の一つ「西洋婦人像」（1882年、東京藝術大学大学美術館蔵）の原田直次郎（1863～1889年）による模写として伝わる作品であり、原田の弟子・伊藤快彦によって旧蔵されていたものである。芳翠によるオリジナルと比べると、白衣のハイライト表現や髪型にわずかな違いがあるものの、細部に至るまでその筆捌きは闊達で破綻なく、全体としてオリジナルの質を備えた優れた模写作品であると言えるだろう。

原田直次郎は、明治17（1884）年に渡独し、ミュンヘン・アカデミーでガブリエル・マックスに師事して堅実な写実表現を学んだ。帰国後は私塾鍾美館を開いて後進を指導し、明治美術会の結成にも参加したが、肺結核を患い36歳という若さで亡くなった。

【学芸員　橋村直樹】

---

おかやまアート・コレクション探検Ⅳ

# 「野﨑家コレクション」

会期：平成24年2月24日（金）～4月8日（日）

江戸時代の後期、岡山県南において広大な塩田・耕地の開発に成功した野﨑武左衛門（1789～1864）は実業家としての手腕だけでなく、茶や和歌などを嗜んだ風流人としても知られます。また、武左衛門の孫武吉郎（1848～1925）は慶應元年（1865）、わずか17才で家督をつぎ、多彩な人脈をもって事業にとりくみ、第1回帝国議会（1890年）から16年間にわたり貴族院議員を務めました。武吉郎も文芸、学問を奨励し、有能な人材を援助しました。また、貧者救済といった社会貢献にも積極的でした。文政12年（1829年）創業以来、代々、家業を継続発展させ、その歴史を伝えてきた野﨑家（現在、ナイカイ塩業株式会社）には、地元作家の作品、野﨑家に逗留した作家の作品、贈答品、記念品など、書画工芸、調度品にいたるまで実に膨大な文物が大切に伝えられています。とくに、武吉郎の時代に、政界、財界をはじめとする幅広い人脈によって収集されたものが多くを占めているようです。

重要文化財に指定されている豪壮な旧野﨑家住宅、よく手入れされた庭園など、観光地としても魅力的な野﨑家塩業歴史館（倉敷市児島味野）の施設はすでに訪れた方も多いと思います。「岡山アートコレクション」4回目となる今回は、野﨑家塩業歴史館の学芸員の方々と一緒に調査を重ねてセレクトした、その一端を紹介します。現地でもめったにお目にかかれない作品が一堂に鑑賞できる絶好の機会です。

【学芸課長　中田利枝子】

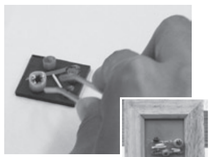
〈掲載作品〉　・原撫松「野﨑武吉郎像」明治37年　・「大山寺縁起絵巻」（部分）　江戸時代中期
・旭焼　錦手花瓶　（初代岡山県令高崎五六より贈呈された品）

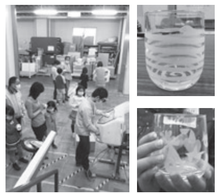
---

国立エルミタージュ美術館所蔵「皇帝の愛したガラス」関連ワークショップ

# 「ガラスとあそぼう！～ガラスの魅力を知る～」

ガラスの加工体験を通して、展覧会をより楽しんでもらうために「ガラスであそぼう!～ガラスの魅力を知る～」と題したワークショップを3つ開催しました。①②のワークショップは倉敷芸術科学大学（家住利男教授、迫田岳臣主任技術員、卒業生&ガラス作家:田邊茉子氏、奥村友梨氏）にご協力をいただき、③は当館職員が講師を務めました。


①ミッレフィオーリ ※1


②サンドブラスト ※2

③ビーズ細工

※1　イタリア語で「千の花」を意味します。あらかじめ切り口に様々な模様が表れるように細工した色ガラス棒を細かく切断（金太郎飴をイメージ）し、型の中に敷き詰め、熱を加えたり、くっつけたりしながら作品をつくる技法です。今回は、すてきなオーナメントを制作しました。

※2　ガラスの表面に、機械を使って研磨剤（細かい砂）を吹き付けます。研磨剤が吹き付けられたところは、細かい傷がつき不透明な磨りガラス状になります。この性質を利用してマスキングシート（テープ）などでガラスの表面を覆い、磨りガラス状態の形を作り出して自分だけのガラスコップを制作しました。

【主任学芸員　岡本裕子】

---

# 岡山芸術回廊

**岡山芸術回廊とは、後楽園・岡山城を中心とした岡山カルチャーゾーンから芸術文化を発信し、文化を核とした地域作りのため、アート作品の展示、演劇・ダンスの公演、音楽の演奏などさまざまな内容で、2011年プレ開催、2012年メイン開催で展開していくものです。**

《プレ開催記念特別展「よりそうけしき ―自然と人間のあいだで―」》　○会場／後楽園、岡山城　○会期／2011年11月13日(日)→12月4日(日)
《メイン開催》○会場／岡山カルチャーゾーン一帯　○会期／2012年11月3日(祝・土)→12月2日(日)

今回、プレ開催をした「岡山芸術回廊」について、実行委員の2人からお話しを伺いました。

### ■ 髙嶋雄一郎（岡山県立美術館 学芸員）

カルチャーゾーン一帯を巡る文化事業として企画された「岡山芸術回廊」のプレ開催として、今年は後楽園と岡山城を舞台に現代美術展「よりそうけしき ―自然と人間のあいだで―」が行なわれた。ここでは事後ながら本展の名称と作家選出について、実行委員の一人としての思いを僭越ながら述べさせて頂きたい。

「よりそうけしき」―この展覧会名には、いくつか理由がある。まず、「けしき」には、昨今の人智を超えた様々な天災に我々が翻弄される現状に思いを馳せ、人間と自然がどのように共存してきたか、いま一度その関わり方を考える契機を求めたいという思いが込められている。また、後楽園や岡山城にとどまらず、もっと広いこの一帯、その全体としての景観を示したかったのもある。「けしき」は風景や景観も差す一方、たとえば茶道具の器にも使われる言葉であり、その非常に懐の深い点にも惹かれた。そして、「よりそう」。この言葉では、自然を制圧するでもない、それに脅かされるのでもない、静的で共存しうるという在り方を模索したい、という願いを表したかった。すべて平仄名にしたのは、柔らかい印象、受け入れやすいものにしたかったからである。こうした様々な我々の思いを反映させて生まれた言葉が、本展覧会名として結実している。

本年度、私が推薦した作家は三人。須田悦弘、冨井大裕、そして中原浩大である。作家を選出する際に念頭にあったのが、後楽園という特別な土地の意味や歴史を与した作品を提案出来ること、自然へと自らの表現を強いるのではなく、そこに溶け込む柔軟さと知性を持っていること、しかし時には自然と拮抗する逞しさをも備えていること、その中で心地よい違和感を我々に与えうること、であった。それに相応しい人選が出来た と自負しているが、皆さんの眼にはどう映っただろうか。

来年は作家も規模も圧倒的に増え、展開する予定となっている。ぜひご期待頂き、その布石として今年の展示を堪能して頂けたならば、幸甚である。

### ■徳田恭子（NPO法人 まちづくり推進機構岡山理事）

芸術回廊をご覧になりましたか？後楽園を中心にカルチャーゾーンの界隈が賑わいました。

この芸術回廊を県内外に発信し、多くの方が岡山を訪れ、アートに触れ、楽しさや面白さを感じてもらったと思います。そしてまたこの街を訪れたいと思った方も多かったことを願っています。

アートをテーマにしたまちづくりは世界各地で大規模なトリエンナーレ、ビエンナーレといった形式で開催されています。国内でも越後妻有・横浜・名古屋・神戸など多くの街で取り組まれています。昨年、瀬戸内海の島々を舞台に開催された瀬戸内国際芸術祭もその一つです。また、小規模ですが全国各地で開催され、奉還町商店街でも出石町でも行われたこともあります。まさにアートの力で「まち」を活性化するアートプロジェクトに注目が続いています。

観光地を持つ街でも持たない街でも、アートがプラスされることで、日常の風景が一変して見え、そこに住む人も訪れる人も何かを感じることができます。この芸術回廊のように街中に点在されているアート作品を見つけながら街を歩くと、知らないうちにその街を知ることになるのです。またそのアート作品を理解しようと脳を活性化してくれます。私はマップを手にして、その街のあちこちを巡り、アート作品と向き合う時、アートがその街の魅力を最大限に表現しているように感じます。アートを取り入れた街に立つことがとても心地よく、大好きです。特にアートのジャンルでも現代美術作品にふれると多様な可能性を感じます。

現代美術は、美術館に行くことのない人や絵に興味のない人にも観る人に想像力を与え、何を表現して、何を感じたかを自分に気付かせ、作品と向き合わせてくれます。大げさかもしれませんが、今まで感じたことのない衝撃に驚き、新鮮さを感じるのです。「なんだこれは？」「これが芸術か？」と思う人もいるかもしれませんが、現代美術の持つ魅力に取りつかれたら抜け出せなくなるかもしれません。

今年の芸術回廊を見逃された方は、来年のメイン開催をぜひ楽しみにしていてください。その間少し現代美術にふれる機会を探してみることをお勧めします。

中原浩大　《ギフチョウ》 1989

須田悦弘　《サザンカ》 2011

冨井大裕　《inside and outside》 2011

茂松庵での展示風景

松本秋則　《音の風景（岡山編）》

中原浩大　《果物グラフ（秋庭）》 2011

**《岡山芸術回廊問い合わせ先》**
岡山芸術回廊事務局（岡山県環境文化部文化振興課内）TEL：086-226-7903　E-mail：bunkasin@pref.okayama.lg.jp

---

## ❀*❀*❀ ニューフェイス紹介 ❀*❀*❀

はじめまして！今年の8月から勤めさせて頂いております、石原亜弓と申します。以前より監視や喫茶アルバイトなどで美術館にふれる機会も多くあったのですが、知らないことや学ぶことにいくつも新しい発見を感じています。

学生時代は主にグラフィックデザインを学んでいました。グラフィックデザインのなかでもフライヤーやポスター、ウェブなどの広告を扱うことが多く、県立美術館には全国から様々な展覧会の広告物が集まってくるので、良い勉強にもなっています。

岡山県立美術館では、チラシやポスター、館内サインなどのデザイン業務に関わりながら、早く仕事の内容を把握できるよう駆けまわる毎日です。広い年齢層に向けたものは気を使う部分がいくつもあり、バリアフリーの意味を違った角度から考えるようになりました。県立の美術館だからこそできること、気を付けなければならないことを探りつつ岡山県立美術館という空間を創っていけたらと思います。

どうぞよろしくお願いします。

【学芸員　石原亜弓】

7月から岡山県立美術館で勤務することになりました、楠原（ならばら）生子と申します。

大学では、民俗学について学んでいました。民俗学と聞くと難しく感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、「昔からそうだと言われていること」や「知識として語り継がれているもの」を文献やフィールドワークから研究する学問です。

卒業してから3年間は県内にある生地メーカーで働いておりました。主にデニムを扱う会社で、生地ができるまでのイロハを学んでいました。ものづくりの会社から一転、美術館で働くこととなりましたが、作品を「展示する」ことは、一からものを作り上げていくことと似ているように感じています。1つの展覧会には想像以上に多くの人が携わり、長い準備期間を経て出来ています。皆様がまた足を運びたくなるような展覧会を開くことがこれからの目標です。

美術館では、主に学芸普及を担当しています。県立美術館のホームページにある、所蔵作品検索や、館内の地下一階にある検索端末の情報管理や入れ替えも行っています。展示中の作品も調べることができるので、ぜひ一度利用してみてください。皆様が快適に鑑賞できる美術館を目指して、現在は日々精進しています。

どうぞよろしくお願いします。

【学芸員　楠原生子】